

近代日本語における当為表現

湯浅 彩央

本論文は、当為表現の歴史的变化について、現代共通語の基盤と考えられる江戸語・東京語、上方語、尾張方言を比較・検討する形で考察した。さらに、『方言文法全国地図』による今日的な様相から各地の形式を整理し、文献資料では埋められない歴史を推定した。当為表現は前項と後項で構成される。

江戸語・東京語での変化は、否定助辞ヌ系形式からナイ系形式へと変化し、前項はネバからナケレバ・ナクテワに、後項はナラヌ・ナラナイが中心形式のなか、イケナイの増加が認められる。また、ヌ系・ナイ系の使い分けは、話者の位相だけでなく、聞き手との親疎関係および場面の緊迫度が大きく関わるということが明らかとなった。

上方語ではヌ系形式のみで、前項はネバ・ニヤからン・ナへと変化し、後項はナラヌが中心でイカンが明治・大正期でも少ない。

それに対し、尾張方言では上方語より新形式が先にあらわれ、江戸時代後期に既に前項ン・ナ、後項イカンがみえる。また今日、関西地方に多く使用されるアカンの語源と考えられる「らちあかん」の当為的用法も認められた。

さらに、標準語（共通語）の定着に大きく寄与したと考えられる国定国語教科書の模様は、同時期の資料に比べ古態的な様相がうかがえた。これは規範となる表現事項を選択的に取り入れる教科書という性格のあらわれと考えられる。

より広い視野からみた『方言文法全国地図』において他の類似表現と比較し、当為表現の特性を検証した。その模様は、前項はナ>ンとの変化が推定され、文献資料とは異なる様子がみられた。そして、後項の分布は、東西に同類事項が存在し、方言圏論的分布が認められた。